

## 「百舌鳥・古市古墳群はなぜ重要か」を聴いて

聴講日：R19.7  
むきばんだやよい塾第20期

### 1.1 大きいだけでない世界遺産

全国に16万基以上はあるといわれる古墳のなかで、日本最大の古墳が堺市にある仁徳天皇陵古墳です。墳丘の大きさは486メートルと、エジプトクフ王のピラミッドや中国の秦の始皇帝陵よりも大きく、世界三大墳墓の一つに数えられる世界に誇る文化遺産です。古墳を上空から見ると、丸と四角を合体させた前方後円墳という日本独自の形で、墳丘の周りには水を湛えた濠が三重に巡り、大仙の名にふさわしい神秘的な悠久の仙山として、地元では大仙陵と呼ばれて親しまれてきました。

仁徳天皇陵古墳は、東アジア世界に進出した王の中の一人を葬った墓といわれ、古代史を解明する上で重要な文化遺産です。現在は、反正天皇陵古墳と履中天皇陵古墳とともに、百舌鳥耳原三陵として宮内庁が管理しているため中に入ることはできませんが、堺市博物館には、仁徳天皇陵古墳に関する資料が展示されています。

### 1.2 登録までの経緯

百舌鳥・古市古墳群の世界遺産登録までの経緯は、まず平成22年11月に国内暫定リストに掲載されましたが、平成29年7月になってやっと国内推薦候補に決定したことで、推薦申請書を作成しました。平成30年1月に3度目の推薦書を日本政府よりユネスコに提出しました。令和元年5月にイコモスより世界遺産への記載が適当との勧告が出され、同年7月6日にユネスコ世界遺産委員会で登録が承認されました。

世界遺産として顕著な普遍的価値を有していると認められるためには、「世界遺産条約履行のための作業指針」で示されている登録基準のいずれか1つ以上に合致しなければなりません。この資産は文化遺産として6つある基準の内、iiiとivでその価値が認められました。

評価基準(iii)の「現存するか消滅するかにかかわらず、ある文化的伝統又は文明の存在を伝承する物証としての無二の存在(少なくとも稀有な存在)である【物証】」に対しては、「百舌鳥・古市古墳群は、墳墓の規模と形によつて当時の政治社会構造を表現した、古墳時代の文化を物語る傑出した物証。」との価値が認められました。

また、評価基準(iv)の「歴史上の重要な段階を物語る建築物、その集合体、科学技術の集合体、あるいは景観を代表する顕著な見本である【類型】」に対しては、「百舌鳥・古市古墳群は、日本列島独自の墳墓型式、すなわち古墳の顕著な事例であり、東アジア情勢を反映した古代王権の形成・発展過程を物語るモニュメント。」であるとの価値が認められました。

### 2.1 巨大前方後円墳(大仙古墳)の実像

宮内庁書陵部が2016年12月に水に覆われた周濠部分の地形調査を実施しました。宮内庁は、将来的に周濠の水を全部抜き、浸食が続く墳丘の護岸工事をする方向で検討しており、排水計画を立てるため、ボートに載せた機器から音波やレーザーを発する方法で水面下の地形を調べ、水量も計測しました。この調査により5世紀の築造当初は、少なくとも525メートルはあったことが判明しました。

周濠に水がある古墳の全長をどこで測るかは学術的な定義がなく、公式の全長を変更する予定はないといえます。古墳の水は、築造当時はなかったか、水位が低かったとみられており、古代の人々が目にした本来の陵の威容は、現在以上だったこととなります。

### 2.2 大仙古墳の埋葬施設と副葬品

堺のことを書いた江戸時代の「全堺詳志」宝暦7年(1757年)刊に後円部の頂上に「石ノ唐櫃」のあることが記され、石のふたのサイズが、長さ3m18cm、幅1m67cm、厚さ24cmであるとされています。重さは石材が凝灰岩として計算すると2～3トンはあると思われます。

明治5年に前方部の前面の斜面で発見された石室と石棺を描いた絵図には、石室の長さは東西方向におよそ3.9m、幅が南北方向におよそ2.4mあまりで、20～30cm程の丸石を積上げて造られ、大石3枚で覆っていたと記されています。石室の中に納められていた石棺は蓋の大きさが幅1.45m、長さ2.4～2.7m、高さは0.9mで、石棺の全体の高さは推定で1.6m程とみられ、石材が凝灰岩として計算すると10～15トン近くはあると思われます。石棺は、蓋石が

丸く盛り上がっていて亀の甲羅のようだと記されています。また石棺を据える時に縄を掛けた縄掛け突起が径42cmと大きく、前面に朱が塗られているのが特徴です。

副葬品を描いた絵図によると、細長く伸ばした銅板を組み合わせて鋳で留めた横矧板鋳留短甲と、長方形の銅製小札を組み合わせて鋳で留め、透彫のある庇や歩揺を付ける小札鋳留眉庇付冑がセットで描かれています。大きさは横矧板鋳留短甲が背の長さ45.5cm、前部が34cm、幅が49.5cmあまりで総体銅鍍金と記されています。小札鋳留眉庇付冑は前後が20.3cmで、同じく総体銅鍍金と記されています。銅に金メッキしたきらびやかな甲冑は、大王の持ち物にふさわしいものです。

### 2.3 大仙古墳の周濠、堤と喪葬儀礼

現在墳丘は三重の周濠で囲まれています。江戸時代の元禄年間に当時の堺奉行所の指示で最外部の濠の一部を除いて畑地に開墾され、ほぼ二重濠のような見かけになっていました。江戸時代の絵図『舳松領絵図 上』に三重目の濠の南西角周辺が残存した姿が描かれており、また残存部以外でも農地の地割に濠の痕跡が認められるため、濠は元々は三重であったと考えられています。現在の三重目の濠は埋没部分を1896年に掘り直し、復元されたもので、明治政府によって行われた再掘削工事によって濠が築造時通りに復元されたかは疑問が残るようです。

墳丘を囲む2つの堤のうち、内側の第1堤の南側に3カ所の調査区を設置し、地表から20～40cm掘り下げたところ、各調査区で直径約35cmの円筒埴輪4～5本が接するように並んでいました。いずれも基底部だけで、上部は割れて失われていました。昭和48年に同時代とみられる円筒埴輪1本が調査地の約100m西で出土していたことを合わせて考えると、埴輪列が堤を1周するように約2.6キロにわたって7千本以上が立てられたと推定できるといいます。ただし、埴輪列があったのは堤の外縁部だけで、墳丘寄りの内縁部では確認されませんでした。大型古墳では堤の両側に埴輪を並べるのが一般的なもので、仁徳天皇陵では当初から内縁部に埴輪列がなかったか、墳丘を囲む周濠の水による浸食で埴輪列や堤の一部が崩落した可能性もあるといえます。一方、堤にはこぶし大の石が敷き詰められていました。堤で石敷きが確認されたのは、仁徳天皇陵がある百舌鳥古墳群では初めてで、堤を荘厳に見せるためとみられます。

また、造出しから須恵器の甕が出土し、古墳が造られた年代を知る資料として話題になっていますし、堀からはいろいろな埴輪が出ています。巫女形埴輪、馬形埴輪、水鳥形埴輪、犬形埴輪などが見つかっており、造出し上での儀礼の一端が示されています。

### 2.4 大仙古墳の陪塚の性格

陪塚とは、大きな古墳の周辺に造られた小型の古墳の中で、主墳に付属するような位置に計画的に配置され、かつ同じような時期に造られた古墳をさします。形は方墳や円墳が多いのですが、帆立貝形の前方後円墳もあります。元々は中国の陪葬墓のような、主墳に葬られた人に、死後の世界でも付き従うために葬られた近親者や従臣、お供の人々の殉葬墓と考えられていました。しかし、最近の研究では、百舌鳥御廟山古墳の陪塚で、多量の滑石製模造品を埋納したカトンボ山古墳のように、特定の副葬品のみを埋納した古墳が多く確認され、本来主墳に副葬するはずのものを、周辺に造った小型の古墳に種類別に副葬品のみを分納した場合もあることがわかってきています。帆立貝形の前方後円墳では人体埋葬が認められる例が多く、近親者や従臣の古墳とみられます。それに対して方墳や円墳では特定の副葬品を多量に埋納したものが多く見られます。

### 2.5 大仙古墳の築造年代と被葬者

日本書紀には、応神天皇の母である神功皇后の記事に120年後の百済の歴史が多数書き込まれていることから、神功、応神の実年代は120年ずれていると言われています。120年ずらすと応神天皇陵の築造年代と合ってきます。しかし、仁徳天皇陵には適用することができないので古墳の被葬者は確定されていません。また、大仙古墳から新しい技法による円筒埴輪が出土していますが、履中天皇が葬られたはずの上石津ミサンザイ古墳では古い型式の円筒埴輪が見つかり、築造順と親子関係が無盾しています。大阪平野を本拠とした新政権の勃興を説く「河内王朝論」が脚光を集めた時期もありましたが、同じような前方後円墳が造り続けられることが多いことなどから、この時代の政治情勢が大阪を選ばせた、と考えられるようになっていきます。

### 3 「群」としての百舌鳥・古市古墳群

日本列島の古墳時代は前期、中期、後期の3期に区分されますが、前期におけるこの古墳群は、前方後円墳、ないしは前方後方墳が採用される段階であり、古墳の墳形や規模による序列の体系の発展途上にあり、古墳時代の成立期と位置づけられます。

続く中期は前葉・中葉・後葉の3期に細分化できます。前葉(4世紀後半)に百舌鳥・古市古墳群における最初の巨大古墳として、津堂城山古墳が造られます。同時期に奈良盆地にも大規模な古墳が造られていますが、この津堂城山古墳のみが二重周濠と幅の広い外堤を備えていて、二重周濠の付設は、津堂城山古墳の築造以降、大型の前方後円墳が備える要素となっています。さらに、津堂城山古墳の埋葬施設は、古墳時代中期に盛行する長持形石棺とそれを覆う竪穴式石槨の組み合わせからなり、副葬品には新式の鉄製甲冑が含まれます。こうした大阪平野の巨大古墳における新たな要素の出現に基づき、古墳造営は新たな段階へと移行したものとみなされており、津堂城山古墳は古墳時代中期の幕開けを示す画期に位置づけられています。

百舌鳥エリアでは、大阪湾を望む小高い台地上に密集して古墳が造られます。大阪湾を航行する船舶から巨大前方後円墳の威容を眺望できるよう、効果的な場所が選ばれています。古市エリアでは、北へ向かってV字状に開く台地及び丘陵上に密集して古墳が造られます。両エリアはほぼ同じ緯度で東西に並び、相互に視認可能な位置関係にありました。津堂城山古墳に引き続いて、古市エリアに我が国第9位の規模の仲姫命陵古墳が造られます。

中葉(5世紀前半)になると、列島最大の墳墓である仁徳天皇陵古墳、第2位の応神天皇陵古墳、第3位の履中天皇陵古墳、さらに墓山古墳、御廟山古墳が造られ、造墓活動が活発になります。

この時期にも奈良盆地の佐紀古墳群や馬見古墳群には大きな古墳が築造されますが、それらの規模はいずれも同時期の大阪平野に築かれた最大規模の古墳には及びません。

後葉(5世紀後半)になると、さらに全国第7位のニサンザイ古墳、允恭天皇陵古墳、白鳥陵古墳が造られます。

このように、百舌鳥・古市古墳群では、古墳時代中期を通じて多数の巨大前方後円墳が造り続けられました。巨大前方後円墳は、古墳時代を通じて合計40基程度が造られますが、その4分の1が古墳時代中期の百舌鳥・古市古墳群に造られたこととなります。さらに、巨大古墳のなかでも特に巨大であり、同時代において日本列島最大規模を誇る古墳は、古墳時代中期を通じて、百舌鳥・古市古墳群において継続して築造されました。すなわち、当時の王やそれに次ぐ有力者たちが葬られたと考えられます。両エリアの古墳は、墳丘の築造規格や埴輪の製作技術といった様々な面で強く結びつき、両者一体のものとして日本列島に多数築造された他地域の古墳の規範となった存在であったと理解されています。

巨大古墳の造営は、古墳時代前期に奈良盆地において始まりましたが、中期の始まりとともにその中心は東アジアとの交流の窓口であった大阪平野に移り、王一族やそれに次ぐ有力者たちの古墳が連綿と築造された百舌鳥・古市古墳群において最盛期を迎えました。

### 4 古墳時代と古墳文化

日本列島では、3世紀中頃に最初の前方後円墳が出現し、それを契機に前方後円墳を頂点とした各種墳形の序列を基盤とする、共通の墓制体系の下に各地で多数の古墳が築造されました。古墳は墳墓としての埋葬や葬送等の墓制に関するばかりでなく、当時の権力者の権威表象を理解するための手がかりとして、極めて重要な位置を占めています。

約350年にわたり、3時期に大別される古墳時代の各時期において、最も巨大かつ新しい様式を備えた前方後円墳は、日本列島の中央部付近に当たる現在の奈良県(古代の大和地域)および大阪府(同じく河内地域)に築造されたのに対し、これらの地域の周辺部にはより小さい古墳が築造されたのです。墳墓における広範な共通性とそこにおける中心と周辺の格差の存在は、この時代に初めて日本列島の広範囲に広がる有力者の政治連合が出現し、列島中央部(大和・河内)の勢力がその中心の位置を占めたことを示すものと理解されています。この政治連合下で、日本列島の広範囲にわたるまとまりを形成した有力者達は、相互の関係性を古墳、特に前方後円墳によって表したものと考えられています。

墳丘の形と大きさの組み合わせにより被葬者の政治的身分を表す古墳は、単に墳墓というだけにとどまらず、政治的モニュメントとしての性格をも帯びていたものと理解されています。このような古墳の分析に基づき、連合的な体制で始まったヤマト王権が地方支配を進め、やがてより集権的な政治体制へと変容していく過程としてこの時代の歴史が描かれます。

その後、6世紀末には大和・河内やその周辺地域で前方後円墳の築造が終了し、7世紀以降、古墳時代の次の時代区分である飛鳥時代が幕を開けます。ヤマト王権を引き継いだこの時代の有力者たちは、中国から新たな宗教や成文法を導入し、制度化された中央集権国家の建設に向かって進んでいきます。墳墓は、簡素化が進み、その後、日本列島においてふたたび巨大な墳墓が造られることはありませんでした。

列島は、使用される利器による時代区分でいえば鉄器時代にあたり、生業は水稻農耕を基盤とする社会でした。東アジア諸国家の交流を背景に朝鮮半島から鍛冶、製陶、乗馬の風習をはじめとする新しい技術および生活様式が伝えられ、人々の暮らしが大きく変容した時代です。これらを背景に様々な活動がなされましたが、その中でも古墳の築造に費やされた労力は突出したものでした。それは、古墳が当該期の階層的な社会構造を視覚的に示したものであり、その築造に極めて大きな社会的意義があったからにほかなりません。

古墳時代の文化は、多大な労働力と多岐にわたる高度な技術、そして副葬品や埴輪を含めたこの時代の文化的営為の結晶である、古墳によって特徴づけられます。さらに、文字の利用がまだ一般化していないこの時代の文化や社会政治体制を考える上で、古墳をはじめとする考古資料はもともと雄弁な手がかりであると評価されています。このような古墳の築造の目的については、後円部の墳丘上の中心に設置した家形埴輪を死者の魂が住まう屋敷と見立て、古墳全体で他界を模造したものとみなす説、あるいは、様々な器財や人物、動物をかたどった形象埴輪によって生前の王の活動やその役割を示したと見る説など、種々の解釈がなされています。

これらの議論に結論を出すことは難しいとしても、当時の他界観がもともと明瞭な形で表されたものが古墳であることは間違いなく、膨大なエネルギーを傾けた巨大な墳墓の築造は、亡き王や有力者を手厚く葬ることが重要視されたことを示していると言えます。

